文法的メタファーとは何か

── M. A. K. ハリデー（1994）第10章をめぐって ──

福　田　一　雄

は　じ　め　に

メタファー（metaphor ＝ 隠喩）は，レトリック，比喩，文彩と呼ばれる言語表現群の中でも，常にもっとも大きな関心を集めてきた。古代ギリシャ，ローマに始まるレトリックが西欧的表現形式，思考形式の基礎を形成しながらも，20世紀に入った頃一度姿を消し，その後20世紀半ばになってから復権をとげてきたことの過程は，佐藤（1992 序章 1）に詳しい。

現在，レトリックは単なる説得の技術あるいは言葉の彩といった役割を越えて，人間の言語能力，あるいは認知能力を考察する上で，言語学およびその隣接諸科学にとって，もっとも興味深い分野の一つとなっている。

では，なぜ現代言語学において，レトリックが関心事になっているのであろうか。たとえば，「男は狼だ」という慣習性の高いメタファーを考えてみる。この文は，Grice（1975）の会話の協調原理の四つの確率（maxim）の内，「質の確率」に違反している。同様に真理条件的に言って偽である。意味論的にも，男は「プラス human」なのに狼は「マイナス human」である。にもかかわらずこの文は，意味のとおる発話として，常にメタファーとして意識されることもなく使用されている。また，このようなメタファーが佐藤（1992）の言うように，「男」と「狼」の類似性を前提に作り出されるものか，Black（1993）の言うように，類似性は前提とされるものではなく，両者の相互作用によって創出されるものであるのか，また，瀬戸（1997）の言うように，相互作用は自然に起こるものではなく，話し手・聞き手の選択によって創られるのか，といっ

た問題がある。さらに，レトリックは人間の言語活動の創造性に深く関わっているという点で，特に意味論，語用論（関連性理論における，言語の「描写的使用」と「解釈的使用」については，Sperber & Wilson 1986，および福田 1996 参照），言語哲学の分野で関心を集めている。

本稿は，M. A. K. ハリデー（1994）第10章で論じられている文法的メタファー（Grammatical Metaphor）の概念を検討し，その言語研究上の意義と問題点を指摘しようとするものである。ハリデーは独自の文法体系である選択体系機能文法（Systemic Functional Grammar）を創始し，この半世紀の間一貫して，世界各国の機能言語学的研究をリードしている。

1．M. A. K. ハリデーの文法観と文法的メタファー

ハリデーの文法体系の全体をこの紙幅で論じることはとうてい不可能である。したがって，今回は，文法的メタファーを考える上で，必要最小限の枠組みだけに言及することにする。文法的メタファーというからには，まずハリデーが文法というものをどのように捉えているかを見る必要がある。ハリデーは「グラマー」という用語を用い，「シンタックス」という用語を用いない。その理由として，シンタックスという用語は一つの言語観を反映しているからであり，彼はそれに組しないからだと言う。“This word（筆者注：syntax）suggests proceeding in a particular direction, such that a language is interpreted as a system of forms, to which meanings are then attached.”（Halliday 1994,xiv）続けてハリデーはみずからの文法観について以下のように述べている。

(1) In a functional grammar, on the other hand, the direction is reversed. A language is interpreted as a system of meanings, accompanied by forms through which the meanings can be realized. The question is rather: “how are these meanings

expressed?" This puts the forms of a language in a different perspective: as means to an end, rather than as an end in themselves.... (Halliday 1994,xiv)

(1)では「形式」と「意味」に関するハリデーの見解が明らかにされている。ハリデーは文法の出発点を意味に置いている。わたしたちのもろもろの経験から生じる意味（意図を含めて）を具現するために選びとられるものが形式なのであると主張される。

出発点となる言語の意味の根本的部門として，ハリデーは三つの機能部門を提案する。観念構成的機能（ideational function），対人的機能（interpersonal function），テキスト形成的機能（textual function）である。これらは言語普遍的なメタファンクションであるとされる。観念構成的機能とは，自己の内的世界と外的世界における経験を解釈し構築するための基本的な仕組みとしての節の機能を考察する部門であり，動詞が作る過程中核部（Process; 以下便宜上，単にプロセスと呼ぶ）や，プロセスと参与要素（participant）と状況要素（circumstance）とが作る過程構成（transitivity）を扱う。過程構成の中心はプロセス・タイプとその他の要素の意味役割である。対人的機能とは，叙法（Mood；以下，ムードと呼ぶ）とモダリティ（Modality；以下，モダリティと呼ぶ）からなり，話し手・聞き手の双方向性が言語にいかに具現するかを構造的に分析する部門である。最後のテクスト形成的部門は，テクストのテクスト性（texture）を保証する意味的・構造的な条件は何かを扱う部門である。たとえば，結束性（cohesion）や首尾一貫性（coherence），主題・題述構造（Theme-Rheme Structure）などの研究がこの部門に入る。伝統的形式文法の守備範囲外の部門である。この部門を持つ点で，ハリデーの文法は，いわゆる文文法（sentence grammar）を超え，談話分析や会話分析と呼ばれる言語学の研究分野と緊密な関係を持つことになる。ハリデーの文法は以上の3部門を中心とする機能的選択のネットワーク体系からなる。いずれの場合も，

意味が出発点となり，表現形式はその具現化として扱われる点で一貫している。

Halliday (1994) はその第10章で「文法的メタファー」なる概念を提案している。メタファーは「男は狼だ」の例からも分かるように，喩える方の「狼」が字義的な「狼」ではなく非字義的に使用されているといった見方が示すように，語義のメタファー的転移 (metaphorical transferrence) と解釈されてきた。ハリデーはそういった語彙的メタファーとしての視点の他に，文法的メタファーという概念を提案したのである。ハリデー以外にも，メタファーは単に語彙の問題ではなく，より大きな根本的な認知システムの問題であると主張する学派がある。Lakoff and Johnson (1980), Lakoff (1993) などの認知言語学の立場である。そのような立場によれば，メタファーは「人生は旅」のメタファー，「議論は戦争」のメタファーなどというように，異なる2領域間の写像関係 (cross-domain mapping) として捉えられ，個々の語義の問題ではなくなる。より根源的なメタファーとして，存在のメタファーや空間のメタファーが提案されている。ハリデーの文法的メタファーは個々の語義を超える点で，レイコフたちの認知言語学的立場と似てはいるが，ハリデーの場合は，彼独自の文法体系におけるメタファンクションを基本的枠組みにしている点で，認知言語学的立場とは大きく異なっている。

ハリデーは，文法的メタファーには大きく分けて二つあるとする。それらは観念構成的メタファーと対人的メタファーである[11]。以下，それぞれについて検討する。

2. 観念構成的メタファー

ハリデーはメタファー，メトニミー (metonymy)，シネクダキ (synecdoche) を一括してMETAPHORと呼んでいるので，本稿でもメタファーという用語を使う場合，この三者の区別を問題にしないことにする。ハリデーは語彙的なメタファーは単に語彙の段階で終わるのではなく，一般に，語彙・文法的 (lexico-grammatical) な変化を伴うと主張する (cf. Halliday 1994: 341)。

そして，メタファーに対立する字義的な表現を 'non-literal' と呼ばず，'congruent'（「一致した」の意；以下，便宜上そのまま congruent とする）と称する。その理由は，ハリデーによれば，'non-literal' は語彙を基準にして字義・非字義を問題にした用語であり，いわば，下から上へ（つまり語彙から上位の意味へ）の方向性を持っているが，ハリデーの文法は上位の意味を出発点にしているため，同一の（厳密には類似の）意味を表すいくつかの表現が，外界の現実の事態をより自然（natural）に表現するものであれば，より congruent であり，より不自然（unnatural）なものであれば，より metaphorical なものであるということである。

観念構成的メタファーは過程構成に関わる。ハリデーの文法における言語の具現化過程は，まず意味があり，次に過程中核部であるプロセス・タイプ[12] が選択され，その次に過程構成に必要な要素（物質過程であれば Actor, Goal その他）が選ばれ，最後に，それらの意味役割を具現するための文法的カテゴリー（名詞群，動詞群，副詞群，前置詞句など）が選ばれるという順になる。まず観念構成的メタファーの内，そのメタファー性がもっとも明示的な例から見てみよう。

(2) a. Mary saw something wonderful. (congruent)
b. A wonderful sight met Mary's eyes. (metaphorical)
(Halliday 1994: 344)

(2a) は，メアリーが何を見たかについての質問に対するもっとも congruent な答えである。一方 (2b) は極めて文法的メタファー性の高い表現とされる。注意すべきは，(2b) において個々の語彙的要素は特にメタフォリカルというわけではないにもかかわらず，文全体としては，メタファー度が高くなっているという点である。(2a)，(2b) の過程構成を簡略化して示せば次のようになる（Pr ＝ プロセス）。

(3) a. Mary saw something wonderful.
Senser Pr: Mental Phenomenon

b. A wonderful sight met Mary's eyes.
Actor Pr: Material Goal

メアリーが何を見たかに対するもっとも congruent な過程構成は心理過程（知覚）であるにもかかわらず，(3b) は物質過程で具現している。しかも 'met' という動詞にマイナス human の Actor が来ている。次の例も典型的な観念構成的メタファーである。

(4) The period 1930-50 had witnessed
Senser Pr: Mental

important changes in juvenile behaviour.
Phenomenon

(*Collins Cobuild* 1987, s.v. 'witness')

Senser は普通，有生であるべきだが，ここでは無生の 'period' がきている。(4)の congruent な過程構成は，次のようなものになるだろう。

(5) Important changes in juvenile behaviour had occurred during the period 1930-50.

ハリデーは，外界の事態をもっとも自然に表す過程構成を，もっとも congruent と考えているのであり，決して，congruent と metaphorical のいずれかが，良い・悪い，あるいは本当の意味と本当でない意味，などと考えているのではない。さらに congruent な過程構成の方が，metaphorical な表現よりも常に頻繁に用いられるなどとは言っていない。むしろその逆のケースの存在も

指摘している（cf. Halliday 1994: 350)。また congruent な表現と metaphorical な表現が全く同じ意味を表していると考えているわけではない。むしろ厳密に言えば，「同じ外界の事態を違った意味で表現している」と捉える。表現が異なれば意味も異なるとするのが機能言語学の本来の立場であるからである（cf. Thompson 1996: 165)。

（2b）と(4)は観念構成的メタファー性がわかりやすい例であったが，メタファーであることが，よりわかりにくい場合もある。その代表的なものが名詞化（Nominalization）の現象である。ハリデーの挙げている例を見てみよう。

(6) The argument to the contrary is
Identified Pr: Relational
basically an appeal to the lack of synonymy in
Identifier
mental language.

(Halliday 1994: 352)

(6)の過程構成は関係的プロセスである。この文を見ただけではどこが観念構成的メタファーなのか不明である。しかし，(6)に相当する congruent な文を考えると次のようになる。

(7) In order to argue that [this] is not so [he] simply points out that there are no synonyms in mental language.

(Halliday 1994: 352)

(6)における ‘argument’ と ‘appeal’ という名詞に注目したい。これらは動詞的名詞であり，(7)でプロセスを表している ‘argue’ と ‘points out’ を名詞化している。このような名詞化をハリデーは文法的メタファーの中の観念構

成的メタファーに含める。名詞化は，現実に生じた事態をより抽象化する。そして，'his argument' のような所有格による表示のケースを除いて，名詞化は「誰が」という情報をしばしば取り除く。さらに，「いつどこで」という情報を消し去る。その結果，起こった事態を，反論不可能な一つの既成事実に転換することができる。現実事態にかかわる動作主や時制から離れるという点において，名詞化は観念構成的メタファーの一つである。

(6)のような表現は，名詞化部分に一般性，反論不可能性を伴うために，科学的論文や論証的議論において好まれるとされる。節数あたりの語彙数が増え，lexical density が高くなる。一方，(7)のような congruent な過程構成は，話し言葉に多く見られる。話し言葉は，節数も増え，文法的には書き言葉よりも複雑であるという一見逆説的な事実をハリデーは指摘している（cf. Halliday 1994: 351)。

観念構成的メタファーの概念は次のような文にも適用される。括弧内に congruent な表現を併記する。

(8) He made a mistake. (He mistook. 筆者注：こちらの方が古めかしい表現である)

(9) She has brown eyes. (Her eyes are brown.)

(10) He writes good books. (He writes books, which are good.) (cf. Halliday 1994: 348)

(8)〜(10)が示すように，観念構成的メタファーが常に論証的書き言葉と結びつくわけではない。科学的・論証的書き言葉と関係があるのは，なによりもまず，名詞化を伴う場合である。(8)のメタファー性は 'make' という動詞の語彙的意味の空白性による。(9)は 'has' という所有の関係的プロセスがメタファーを創っている。(10)のメタファー性は名詞化の場合と似たところがある。つまり，'good books' には 'books are（またはwere）good' という関係的プロセ

スがメタファー化されている。'good books' は外界の具体性を取り除き，一般性を獲得していると言える。

以上，ハリデーの文法的メタファーの一つである観念構成的メタファーについて見てきた。ハリデーの観念構成的メタファーには，「congruent な過程構成を，別のより不自然な過程構成に変化させる場合」と「過程構成そのものが吸収されて姿を消す場合」の二つのケースが見られた。残る疑問は，プロセスになんら変化がないにもかかわらず，他の意味役割である参与要素や状況要素に変化があるケースは観念構成的メタファーと呼ばないのであろうか，それとも，それも過程構成の変化と見て観念構成的メタファーに含めるのだろうかということである。この点については，第4節で再度取り上げる。

次にもう一つの文法的メタファーとされる対人的メタファーについて考える。

3．対人的メタファー

3.1 モダリティのメタファー

ハリデーの三つのメタファンクションの一つである対人機能には，二つの文法概念が含まれる。一つはモダリティであり，もう一つはムードである。ムードについては後述する。モダリティに関して，この概念を包括的に捉えるために，ハリデーは四つのタイプ（type）を設けている。蓋然性（probability）と通常性（usuality），義務性（obligation）と志向性（inclination）の4種である。前2者を modalization モダリティ（'epistemic' と同意），後2者を modulation モダリティ（'deontic' と同意）と呼んでいる。それらを横軸とすると，縦軸には 'yes'（最上位）と 'no'（最下位）の中間領域をもうけ，その領域を埋める役割をモダリティ表現の機能であるとしている。そして，上位から順に上，中，下という価（value）を付与している。さらに指向（orientation）という概念を設定し，モダリティ表現を subjective／explicit, subjective／implicit, objective／implicit, objective／explicit に区分している。さらにモダリティ表現自体の肯否極性（polarity）を肯定，直接否定，転

移否定に3分している。つまり，モダリティのカテゴリーを，＜（タイプ4種）x（指向4種）x（価3種）x（肯否極性3種）＝144種類＞としている（cf. Halliday 1994: 359)。

たとえば，modalization モダリティに分類される蓋然性に関して考えてみる。subjective／implicit なモダリティはその「タイプ」にかかわらず，すべて法助動詞で表されるものとされ，蓋然性の場合には must／will／may である。'it is' と 'it isn't' の中間領域を埋めるものであり，'it must be' の「価」が一番高く，'it will be'，'it may be' の順に「価」が低くなる。複数の特性をまとめて表示すると次のようになる。すべて蓋然性タイプである。

(11) it must be
(orientation:subjective／implicit, value: high,
polarity: positive)

(12) it will be
(orientation:subjective／implicit, value: median,
polarity: positive)

(13) it may be
(orientation:subjective／implicit, value: low,
polarity: positive)

次に，同じく蓋然性タイプに入る法副詞の場合を見てみよう。法副詞はすべてobjectiveな「指向」を持ち，文頭，文中のいずれの位置に出現しても，implicitとみなされる。

(14) certainly (orientation: objective／implicit, value: high)

(15) probably (orientation: objective／implicit, value: median)

(16) possibly (orientation: objective／implicit, value: low)
(polarityは法副詞固有の機能ではないから，表示は不要)

(11)〜(16)のような implicit な「指向」を持つモダリティ表現は，対人的メタファーに関係しない。これらはすべて congruent とされる。対人的メタファーとしてのモダリティ・メタファーは，すべて explicit な「指向」を有するものとされる。 'explicit' とは，モダリティの対象となる節の内部ではなくて，その節の外側の別の節で当該のモダリティを表示する場合を指す。モダリティ・メタファーには，subjective／explicit なものと objective／explicit なものがある。次の例を見てみよう。

(17) I don't think that Mary knows. (Halliday 1994: 356)
(congruent: Mary won't know.)
(18) It's certain that Mary doesn't know. (Halliday 1994: 358)
(congruent: Mary certainly doesn't know)

(17), (18)とも蓋然性タイプであるが，そのモダリティが文法上の主節において示されていて，意味的重要性を担う文法的従属節内において示されていない。その意味的重要性は(17), (18)を付加疑問文にすることにより明らかになる。いずれの場合も，'does she?' となる。(17), (18)のように，congruent には，本来，法助動詞か，法副詞によって表されるべきモダリティを，文法的な主節によって表す場合を対人的メタファーとしてのモダリティ・メタファーと称する。ちなみに 'I don't think' は (orientation: subjective／explicit, value: median, polarity: transferred negative[3]) であり，'It's certain' は (orientation: objective／explicit, value: high, polarity: positive) となる。このように客観的モダリティであろうと主観的モダリティであろうと，explicit な構造を持つ場合をモダリティ・メタファーとハリデーは呼ぶのである。

モダリティとは何かをもう一度ここで考えてみると，おおよそ，ある命題に対する話し手の判断や態度を示すものであると定義できよう。ハリデーの分類では，「蓋然性」，「通常性」，「義務性」，「志向性」に分けられた。モダリティは多くの場合，福田（1998）で論じたような語用論的機能と関係がある。たとえばハリデーの言うように，モダリティは 'it is' と 'it isn't' の中間領域を埋めるものであるがゆえに，自信のあることをあたかも自信のないように述べたり，自信のないことを自信ありげに述べたりするときに使われることが多い。Halliday (1994: 362) はこれを「言語システムのパラドックス」と呼んでいる。では，モダリティ・メタファー使用の語用論的な動機は何であろうか。ハリデーによれば，この種のメタファーはすべて主観的モダリティをより explicit に，あるいは客観的モダリティをより explicit に表すかのいずれかである。だとすれば subjective／explicit の 'I think' は客観性を弱めるためのヘッジとして，'It is certain' は客観性を強めるためのブースターとして機能すると言うことができる。つまり同じ機能を持つ法助動詞や，法副詞よりもさらに一層，「弱め」や「強め」の機能を明示的に示すことができるのである。

モダリティ・メタファーと称するからには，当然 congruent な形式を前提にしている。ハリデーの場合，modalization モダリティにおいては法助動詞および法副詞（文中の位置にかかわらず），modulation モダリティにおいては法助動詞と required／supposed／allowed（以上，義務性）そして determined／keen／willing（以上，志向性）が congruent なものである。ただし，required／supposed／allowedとdetermined については，法助動詞と同じように，モダリティを受けるべき節内で使用される場合（つまり，'you are required to go' など）は congruent だが，'it is required that...' のように文法的主節に生じる場合は，metaphorical とみなされることに注意したい。

3.2 ムードのメタファー

ハリデーのムードの構造は，ムード（Subject ＋ Finite）と残余部（Residue）の2項構造からなり，種類として，平叙，疑問，命令などに分かれる。重要なのはそれらが表す speech function であり，4種類に分類される。陳述（statement），質問（question），提供（offer），命令（command）である。ムードは speech function を担う。ハリデーは言語の対人的機能における交換的側面の基礎を「情報のやり取り」と「品物 ／ 行為（goods & services）のやりとり」の二つに置くことにより，「提供」を含むこの4種の基本的 speech function を設定している。ハリデーの speech function という用語は発話行為理論（speech act theory）における発語内行為（illocutionary act）と極めて似通ったものである。実際，Halliday（1994: 363）は 'offering' を初めとして，60余りの英語の発話行為動詞を列挙している。それらはすべてハリデーの言う speech function を示すものである。しかし，ハリデーは，基本的 speech function（4種）以外の speech function は，基本からのレトリック的変容と捉えている。言語的・状況的文脈，さらに声質・身振りなどのパラ言語的な要因によって様々な speech function が生じることを認めつつ，それら個々の具体的な研究は語用論分野にまかせた方が良いと考えているように見える。言語の構造に常に密着した研究を旨とするハリデーにとって，四つの基本的な speech function が出発点となる。つまり，話し手は，どのようなレトリック的な speech function を表すにも，4つの基本的な speech function のいずれかを表すムード構造を選ばなくてはならないのである（cf. Halliday 1994:365)。

さて，平叙ムードが「陳述」を，疑問ムードが「質問」を表していれば，それは congruent なムードである。しかし，しばしば指摘されるように，自然言語はそのようにはできていない。次の例を参照されたい。

(19) I was wondering if the position is still available.

(Halliday 1994: 367)

(20) Would you mind waiting outside a moment?

(*Collins Cobuild* 1987, s.v. 'mind')

(19)は平叙ムードで質問を表し，(20)は疑問ムードで要求を表している。ハリデーは(19)，(20)のような例をムードのメタファーと呼ぶ。(19)，(20)は比較的慣習度の高いメタファーであるが，次の例は大きく文脈に依存している。

(21) I'll shoot the pianist. (Halliday 1994: 363)

かりに(21)が単なる「陳述」であったなら，それは congruent なケースであるが，そのようなケースのほうがまれであろう。(21)は文脈によって，「脅迫」，「約束」，「ブラック・ジョーク」などになるだろう。そうなればメタファーとしての用法になる。

この時点でわたしたちは，ハリデーのムードのメタファーは，Searle (1975) などの間接的発話行為 (Indirect Speech Act) と同じ現象を問題にしていることに気付く。実際ハリデーもそれを認めつつ，次のように自説の長所について述べている。

(22) Metaphors of this kind have been extensively studied in speech act theory, originally under the heading of 'perlocutionary' acts.[4] From a linguistic point of view they are not a separate phenomenon, but another aspect of the general phenomenon of metaphor, like the ideational metaphors discussed in the first half of the chapter.

(Halliday 1994: 365-6)

ハリデーは，間接的発話行為に相当する言語現象を，文法的メタファーの概念によって説明しようとしているのである。興味深いことに，Searle (1993) は，そのメタファー論において，メタファーは間接的発話行為の一種であると言明している。同一の現象を扱っていても，理論的枠組みが違えば，捉え方が全く異なることがよくある。分類の名称はさておき，ムードのメタファーの持つ間接性は，「弱め」のモダリティの場合と同様，Brown and Levinson (1978) の言うポライトネス（とりわけ消極的ポライトネス）が主な動機になっている場合が多いと考えられる。(19)，(20)はその典型例である。ムードのメタファーは書き言葉よりも会話などの話し言葉に多いと予測される。

以上検討してきたムードのメタファーに関しては，congruent と metaphorical の区別が観念構成的メタファーやモダリティのメタファーに比してより明確である。その理由は，基本的ムード構造とそれが表す congruent な基本的 speech function の関係が明確だからである。そして，それからの変容としての speech function をメタファーと認定すればよいからである。

4．文法的メタファーの言語研究上の意義と問題点

意味と機能を出発点にするハリデーの選択体系機能文法では，形式上は異なるいくつかの表現が，実は一つの機能的概念に集約されるという事実に驚かされることがある。たとえば，モダリティを考えるとき，わたしたちはまず法助動詞を真っ先に意識し，つぎに法副詞の存在を思い起こすだろう。しかし，ハリデーのように機能的な立場を取れば，次のような一見モダリティと無関係に見える構文が，objective／explicit なモダリティ・メタファーとして一括できることが分かる。これが第一のメリットである。

(23) a. It is obvious that he disclosed information about the company.

b. Every one admits that he disclosed information about

the company.

c. No sane person would pretend that he did not disclose information about the company.

d. Commonsense determines that he disclosed information about the company.

e. You can't seriously doubt that he disclosed information about the company.

(Halliday 1994: 355, 筆者による一部修正を含む)

第二のメリットは体系性である。「現実の事態にもっとも一致した」表現をcongruent と規定することによって，観念構成的部門，対人的部門，（さらに可能性としてはテクスト形成的部門）という言語のメタファンクションについてそれぞれ文法的メタファーを体系づけるという展望が得られる。Thompson (1996: 165) も指摘するように，文法的メタファーは語彙的メタファーをその下位概念に包括できる可能性を持っている。語彙的メタファーの範囲にとどまる限り，このような視点を得ることは困難である。

第三のメリットは，名詞化現象を文法的メタファーとしての観念構成的メタファーの観点から説明している点である。科学的，論証的書き言葉に名詞化が多いという指摘は正しい[5]。第2節でも触れたように，名詞化によって失われるものと新たに獲得されるものがある。'compare' から 'comparison' になれば，動作主（所有格による表示の場合を除いて）やダイクシスを失う代わりに，客観性，一般性，反論不可能性を獲得し，さらにまた別種のプロセスの参与要素になることによって，節の主題（Theme）や焦点（focus）になる可能性を獲得するのである。

次に，問題点を三つ挙げておきたい。一つは congruent な言い回しへの言い換えの可能性に関してである。ハリデーは congruent と metaphorical は程度の問題であるとし，より congruent な表現への言い換えは段階的に複数

存在する可能性があると言っている（Halliday 1994: 344, 348)。確かに，メタファー性には（裏返せばcongruent性にも）段階があると考えるのは正しい認識であるが，一方で，もっともcongruentな文を唯一的に同定することはかならずしも簡単ではない。たとえば，'He is a gorilla.' というメタファーのもっとも congruent なパラフレーズは何だろうか。'He is violent.' あるいは 'He is insensitive.' それとも 'He is ugly.' か，といったようにいくつかのパラフレーズが可能である。しかもそれらの内のいずれがもっとも適切であるかの決定は文脈や話し手・聞き手の共通想定に左右され，きわめて語用論的な性質のものとなる。

第二の問題点は，第2節の最後で少し触れたように，観念構成的メタファーは，プロセス・タイプの変化や吸収に限られるのか否かという問題である。この点が Halliday (1994) 第10章においてはあまり明確でない。本稿第 2 節で挙げた (2b) や(4)は congruent な言い換えをすれば，明らかにプロセス・タイプに変化を生じる。しかしすべてのメタファーがプロセス・タイプに変化を起こすとは限らない。たとえば，普通に見られる「彼はゴリラだ」,「男は狼だ」,「人生は旅だ」のような「AはBだ」形式のプロセスは関係的プロセス（属性的であり，同定的なものではない）である。これらの形式のメタファーはかりに congruent な表現にパラフレーズしても，その関係的プロセス（属性的）をかならずしも変える必要がない。ハリデーは，このような例は語彙的メタファーとして，別に処理するのか，それともこのような例も観念構成的メタファーで説明しようとするのだろうか。

第三の問題は文全体がメタファーとなりうる場合に関するものである。次の例を見てみよう。

(24) a. He ran into a stone wall.（『新編・英和活用大辞典』研究社 1995, s.v. 'wall'）

b. She dragged him through mud.（同上, s.v. 'mud'）

(24a), (24b) は文脈によって, congruent とも metaphorical とも解釈できる。そしてその決め手は, パラ言語的特徴も含めて, 語用論的な要因である。(24a), (24b) のようなケースは, ハリデーの過程構成のあり方に基づく観念構成的メタファーによっては説明困難である。

む す び

Halliday (1994) 第10章をめぐって, ハリデーの声に耳を傾けながら検討してきた。語彙だけではなく文法にも congruent と metaphorical な (段階的) 区別があるという指摘は魅力的である。特に観念構成的メタファーとしての名詞化の機能についての指摘は示唆的である。多様なモダリティ・メタファーについても 'explicit' という概念が説得力を持つ。総じて, 文法的メタファーは, その体系志向性と包括性において, さらに, 言語理論のみならず, 言語教育・言語学習にとって有益な示唆を与えるという点において, 評価されるべきである。同時に, とりわけ観念構成的メタファーに関しては, 第4節で指摘したようにいくつかの問題点が残される。

今後の研究課題としては, 科学的, 論証的書き言葉の中の名詞化現象とその機能の考察や, 話し言葉と書き言葉におけるモダリティ・メタファーの用法を subjective モダリティと objective モダリティとの関連で調査することなどが考えられる。

【謝　　辞】

苅部恒徳教授御退官の記念論集に，こうして書く機会を与えて下さった編集部に謝意を表したい。苅部教授には，教養部英語科時代を含め21年の長きにわたり，公私ともに暖かいご指導を賜った。改めて心から御礼申し上げる。

【注】

＜ハリデーの専門用語の訳語については，山口・筧（2001）が大いに参考になった。＞

(1) Halliday (1994) では，テクスト形成的メタファーについての言及がない。しかし，Martin (1992: 417) やThompson (1996: 176) には，テクスト形成的メタファーについての記述が見られる。

(2) Halliday (1994:108) は全部で6種類のプロセス・タイプを提案している。物質過程 (material)，存在過程 (existential)，関係過程 (relational)，発言過程 (verbal)，心理過程 (mental)，行動過程 (behavioural) である。

(3) 例(17)のような否定辞転移についてHalliday (1994: 358-9) は興味深い指摘をしている。「価」がmedianのモダリティ・メタファーだけに否定辞転移は許され，「価」がhighやlowのものには許されないとされる。(18)の 'certain' は「価」がhighであるため，'it is certain' と 'it isn't certain' ではモダリティが変化する。

(4) この部分で，ハリデーは 'perlocutionary' と言っているが，'illocutionary' とすべきところであろう。

(5) Thompson (1996: 171) は，論文などの専門用語 (technical term) は，名詞化による観念構成的メタファーであると述べている。専門用語の意味を説明するためには，様々な congruent なプロセス・タイプからなる記述を必要とするからである。

【参 考 文 献】

Black, M. (1993) "More about Metaphor", in Ortony (*ed.*), pp.19-41.

Brown, P. and S. C. Levinson (1978) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.

福田一雄 (1996)「関連性理論と非字義的発話の伝達過程」『新潟大学言語文化研究』第2号15～29頁.

福田一雄 (1998)「日本語のマキシム・ヘッジとマキシム・ブースター ―― 語用論的言語学の一視点」『人文科学研究』98輯（新潟大学人文学部）21～42頁.

Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation", in Cole, P. and J. L. Morgan (*eds.*) *Syntax and Semantics* 3, New York: Academic Press, pp.41-58.

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd Ed.,

London: Edward Arnold. 山口 登・筧 壽雄（訳）(2001)『機能文法概説 — ハリデー理論への誘い』東京：くろしお出版.

Lakoff, G. (1993) "The Contemporary Theory of Metaphor", in Ortony (*ed.*), pp.202-251.

Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago: The University of Chicago Press. 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（訳）(1986)『レトリックと人生』東京：大修館.

Martin, J. R. (1992) *English Text — System and Structure*, Amsterdam: John Benjamins.

Ortony, A. (*ed.*) (1993) *Metaphor and Thought*, 2nd Ed., Cambridge: Cambridge University Press.

佐藤信夫 (1992)『レトリック感覚』東京：講談社.

Searle, J. R. (1975) "Indirect Speech Act", in Cole, P. and J. L. Morgan (*eds.*) *Syntax and Semantics* 3, New York: Academic Press, pp.59-82.

Searle, J. R. (1993) "Metaphor", in Ortony (*ed.*), pp.83-111.

瀬戸賢一 (1997)『認識のレトリック』東京：海鳴社.

Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell. 内田聖二・中逵俊明・宗 南先・田中圭子（訳）『関連性理論 — 伝達と認知』東京：研究社.

Thompson, G. (1996) *Introducing Functional Grammar*, London: Edward Arnold.